

愛と死の淵より

汚れなき魂の記録

辻 玄子



愛と死の淵より

―汚れなき魂の記録―

昭和四十八年十二月十日 初版発行

著 者 辻 玄 子

発 行 者 大 和 た か

発 行 所 大和出版販売株式会社

東京都豊島区西池袋二丁目〇番二
郵便番号 一七七一

電話 東京 九八三一六二六二

振替 東京 一八二七三六

(乱丁・落丁のものは、お取替えいたします)

印刷・東光印刷 製本・誠幸堂

©1973 Michiko Tsuji. Printed in Japan.

0312-010090-4452

愛と死の淵より

汚れなき魂の記録



辻 玄子

大和出版

かあちゃん、

吐くのが、

とまったら、

あつい 紅茶、

のましてね――

短かった生命のつきる数時間前

優子は

やわらかな声でそういった。

どんなにか苦しかっただろうに

あの子は

あるとき

明日を信じていたのだ。

泣かないで泣いている母

堀 秀彦

校正刷で、この本——いや、本というより、小学三年の優子ちゃんが、一日一日と、苦しみ泣きわめきながら癌のために殺されていく、死への記録を読むのは、私には大へん辛かった。二、三十頁読んではやめた。やめて、一、二時間、私はやはりそのさきを読まずにおれなかった。最後の章「ごめんね、優子」をゆっくり読んでいるうちにとうとう涙を押えることができなくなった。読みおえて、暗然とした。いたいけな優子ちゃんの短かった生命のための涙か、「肝じんなことは何一つしてあげられなかった。今はただ見ていることしかできない」と書いたお母さんの人間としての切なさ、せっぱつまった母の愛情を思つての涙か。

お母さんよ。あなたはなぜこういう悲しい、しかもこの上なく丹念なわが子の死への歩みを記録せずにおれなかったのか！ この母の悲しみを慰めうるものは、この地上には、何一つない。「しろがねもこがねも——」というあの万葉の古

歌を思い出す。お母さんはいつまでこの悲痛を胸にかかえて生きるのだろう。

いやな本だ。ページごとに母の涙がしたたっている。優子ちゃんの明るさの上に。むしろ生まれていくその幼い生命の上に。私は改めて癌というこの悪魔、二年前、私の妻の生命をひっそらっていったこの悪魔を呪わずにおれぬ。医学はここでは完全に無力なのだ。お医者さんの親切も懸命の努力も、母の祈りも、ここでは一切無意味に近いのだ。「バラの花が美しく咲くこの地上に、なんだって癌などという細胞が存在するのか」。私はかつて私の本のなかで書いたこの言葉をもう一度書かずにおれない。

著者であるお母さんの美しくこまめな筆は、ここでは能うかぎり感情の噴出をおさえている。母は、せきあげる涙を必死にこらえて、一行一行、書きつづっている。そのことが読むものの胸にひしひしとくい込んでくる。母は泣かない。泣かないで泣いている。こんな泣きかたをしなければならぬ人間の悲しみに私は目をそらさずにおれぬ。

優子ちゃんは亡くなった。だがお母さんは死の日までこの悲しみをどうすることも出来ないのだ。なぜこの世にこんな病気があるのか。私は毎日聖書を開くのだが、何も分からない。私はこの未知のお母さんにひと目会いたいと思う。だが、会って見たところで、どうなるものでもない。

目次

泣かないで泣いている母……堀 秀彦……4

1 悲しみへの序曲

* 優子の手紙と日記……12

おなかが痛い……20

卵巣摘出……25

リユーマチ熱のころ……32

手術のあと……37

* 優子の作文……40

2 癌という名の不幸

卵巣胎児性癌……44

* 優子の日記……48

3

明日を信じて

ラジオをつけて……………	50
腹膜炎は損やなあ……………	54
ことしはお花見あかな……………	63
*前川先生の記録……………	64
髪の手が抜ける……………	71
仮釈放……………	74

4

転移、再手術

もどってきた平和……………	78
*前川先生の記録……………	80
二度とない日々……………	87
*前川先生の記録……………	91
おしっこする時痛い……………	94
*優子の日記……………	100

5

生命よ燃えよ

ふたたび入院……………	111
* 交換日記(優子)……………	107
とおし反対……………	109
* 前川先生の記録……………	110
外科の先生立入禁止……………	118
* 交換日記(優子)……………	119
* 交換日記(前川先生)……………	121
* 前川先生の記録……………	126
かあちゃんの血でないといや……………	130
優子の「青春」……………	134
* 優子の手紙……………	137
いつまで続く入院生活……………	144
* 優子の手紙……………	148
悪だくみはだれだ……………	152
* 交換日記……………	155

目 次

7	6
ごめんね、優子	希望は断たれた
薬をのんでも効かない……………208	腸閉塞……………174
* 優子の作文……………203	* 交換日記(優子)……………177
終局のあしおと……………200	最後の手術……………180
沈黙の日々……………193	先生がうそついた……………186
* 前川先生の記録……………188	
	出たいのに出ない……………167
	* 交換日記(優子)……………164
	ソロバン教えてね……………163
	十二日間の退院……………159

	食べたくても食べられない……	212
	* 前川先生の記録……	215
	もうなんにもいや……	220
	だめだ！ はやく！……	223
	*	
	医師として 北見義輝……	230
後記	辻大風……	235

1

悲しみへの序曲

*

おばあちゃん、お元気ですか。

わたしは、だいぶよくなつて、金曜日から、学校へ行きます。

あしたは、せつぶんなので、びょうきのおにを、おっぱらおうと、思っています。

冬は、まめまきからはるになり、もものせつく、しんがつきと、いろいろあるから いそがしいのに、まだ えんそくがのこっています。

おわかれえんそくは、どこへ行くのか、たのしみです。

また 春休みに行きます。おばあちゃんも来てね。バイバイ

2月3日 つじ ゆう子

*

わたしは、きょう おいしゃさんに いきました。いって ちゅうしゃを しました。血をとる ちゅうしゃ です。

ベッドにねて、

「いたいぞ、いたいぞ」

と 思いながら、目を つぶり、てを にぎり ました。

かんごふさんが うでに ゴムを まいて くれて、ちゅうしゃを だし ました。

さした とき、

「あいたっ」

と さけびそうに になりました。でも さすと いたく なくなりました。

けれども、血がなかなかでない
ので、長いことやって、
やっと おわり ました。

とちゅうで かんごふさんが、

「ゆう子ちゃんの 血、けちやね。もっと だして ちょうだい」
と いていた。

帰るとき また いたく なって きた。かあちゃんが、

「小さいころ は、血の くだ が みえへんかった から、首か
ら とったのよ。小さいときは、そんな ことを したら、すご
く こわかった けど、今は どうもないわ」

と、いていた。

ポクは、もう そんなの されるの、ヤーヨ。

*

おばあちゃん お元気ですか。

わたしは、やつとなおった かと 思ったら、また ぶりかえして、今しゅう いっぱい 学校を 休め といわれて しまいました。

わたしは、きょう さんかん日 だったので、学校へ 行かない のが くやしい です。でも、いま やすんで おかないと、こんど 一か月も やすまされ たら、それこそ たいへん。それから おばあちゃん、おには外 の まめが たりなかったら、もらった まめと コンペートを まくよ。

では、また いつか 来てね。ユーちゃんは、たいくつで しょうがない から。

では さようなら。

いや、まだ 話が ありました。